

【原著】

小学生の学級生活満足度に対する家族関係における
ソーシャルサポート、ストレスの影響についての一考察

小泉 智巳* 河村 茂雄**

本研究は、児童が日常の家族関係の中でストレスとして認知している内容を明らかにし「小学生用家族関係ストレス尺度」を作成すること、学級満足度に対して、児童の認知する家族関係におけるソーシャルサポート、ストレスの影響が考えられる児童について考察することの2つを目的とした。結果、①「小学生用家族関係ストレス尺度」は、「家族からの期待・強制」、「家族関係の希薄・不安定」の2因子が抽出され、信頼性が確認された。また、②家族からのソーシャルサポートの期待がより高い場合には学校での意欲的な行動につながり、家族関係におけるストレスの認知がより高い場合には不適応行動に至る可能性があることが示唆された。そして、③家族関係におけるソーシャルサポートとストレスのバランスの違いにより、児童の学級生活に対する満足度にも違いが認められた。特に、サポート期待は低いもののストレス認知が高いLHタイプの児童の学級生活満足度は、侵害行為認知群と学級生活不満足群を合わせると約8割を占める結果となり、二次的教育援助以上を意識した対応を教師はとる必要がある。

キーワード：小学生、学級生活満足度、ソーシャルサポート、家族関係ストレス

【問題と目的】

近年、核家族化、非婚化、晩婚化、シングル化、少子化、といったような家族についてのさまざまな家族変動の様態が表されている。また、離婚率の増加、育児ノイローゼ、児童虐待、ドメスティック・バイオレンス、老親の扶養・介護、などの家族の中で起こっている心理・行動の問題も身近なものとなっている（柏木, 2003; 中釜, 2001; 岡堂, 2000）。つまり、今日の家族が置かれている状況は、取り囲む社会状況に大きな影響を受けながら家族形態の多様化が進行し、それともなった家族の心理・行動の問題がメディアに取り上げられるほどに噴出している現状である。ほとんどすべての人間が一生を通じ、何らかの形で家族と関わりながら暮らしているため、家族は最も身近で重要な集団である。したがって、このような家族形態の多様化の進行にともなう家族機能の縮小の影響が考えられ、日常生活を共にし、身近に持続的な関係を持つ

家族との相互作用は、特に子どもの適応や発達にとって重要な要因になってくると考えられる。

また、学校現場に目を向けてみると、暴力行為、いじめ、不登校、高等学校中途退学などの生徒指導上の問題状況が報告されている（文部科学省, 2011）。このような子どもの問題行動や症状的行動は、家族関係あるいは近隣関係の病理が複合的、循環的に作用して生じたと判断される場合が多い（岡堂, 2000）。つまり、学校場面における子どもの問題行動や症状的行動には、家族の心理・行動の問題が複合的に関連している場合もあると考えられる。

家庭生活と学校での子どもの行動や適応の関係について検討した研究がいくつかみられる（長谷川, 2001; 井上, 1992; 亀口, 1991; 西出・夏野, 1995; 築地, 1999）。亀口（1991）や井上（1992）や長谷川（2001）の事例研究によって、子どもの不適応に対する援助機能の弱さや家族関係の問題などが示唆されている。また、西出・夏野（1995）や築地（1999）の実証研究によって、子どもの認知する家族関係が子どもの行動や適応に影響していることが示されている。こ

* 山形県スクールカウンセラー

** 早稲田大学 教育・総合科学学術院

これらの研究から、発達過程にある子どもにとって、家族関係と学校での子どもの行動や適応とは深い関係にあることが考えられる。また、家族をシステムとして1つのまとまりと捉えた場合に、子どもの認知する家族関係が重要であると考えられる。したがって、これらの研究によって、家族の心理・行動の問題が複合的に関連していることから起こる問題行動や症状的行動の生起プロセスを明らかにすることが試みられている。そして、明らかにされた知見が最終的に目指すところは、子どもたちの学校場面における不適応に対する予防や解決の方策を探るとともに、子どもたちの心身の発達や健康増進を図ることにあると思われる。

家族の心理・行動の問題を取り上げる際に注意すべき点として、亀口(1997)は、子どもの問題行動の発生要因のひとつとされる家庭的な要因として、通常欠損家庭が問題とされることが多いが、親の欠損がそのまま子どもの問題行動を発生させると考えるべきではない。欠損がひとつの契機となって、家庭内に起こる人間関係のさまざまなゆがみやストレスが、問題発生の要因になっていくと述べている。つまり、家族形態や構造のみを問題にすることは、子どもの問題行動や症状的行動の原因をステレオタイプ的に家族に求めてしまう危険を含んでおり、問題行動や症状的行動を示している子どもや支えている家族の支援・援助につながりにくいと考えられる。また、日常生活を共にし、持続的な関係を持つ家族だからこそ、家族の心理・行動の問題は、子どもの要因と家族の要因が相互に影響し合い、複雑な様相を呈していると考えられる。したがって、家族形態や構造のみを問題にするのではなく、家庭内のゆがみやストレスによって生じられる家族の心理・行動の問題を、子どもの心理的プロセスを1つの視点として包括的に捉えることが、家族の要因が大きく関わっている子どもの問題行動や症状的行動の予防や解決を図る上でも有効であると考えられる。

Lazarus & Folkman (1984) の提唱した心理的ストレス理論は、その後の心理的ストレス研究に大きな影響を及ぼし、特に学校場面において児童生徒の心理的ストレスとメンタル・ヘルスとの関連について明らかにする試みが数多く行われている。例えば、小学生の学校生活におけるストレスを調査した試み(嶋田・岡安・坂野, 1992)、小学生のストレス反応を調査し

た試み(嶋田・片ヶ崎・坂野, 1994)、学校ストレスに対する認知的評価やソーシャルサポートがストレス反応に及ぼす影響(岡安・嶋田・坂野, 1993; 嶋田・三浦・坂野・上里, 1996)など多くの知見が明らかにされた。Lazarus & Folkman (1984) は、個人差変数に注目し、ストレスを適応のための一連の心理的プロセスとして包括的に捉え、①外界からの刺激であるストレスの経験、②ストレスに対する認知的評価、③それに対処すること、④その結果として生じるストレス反応、の大きく4つの段階から構成されるとしている。また、ストレスモデルの個人要因に関連して、個人のストレス反応を緩衝する要因のひとつとして、ソーシャルサポートの概念があげられる。サポートしてもらえると期待の高さが、ストレスに対する認知的評価に影響を及ぼすことによって、緩衝要因となっていることが考えられる(岡安・嶋田・坂野, 1993)。つまり、Lazarus & Folkman (1984) の心理的ストレス理論は、ストレスを一連のプロセスとし、プロセスに影響を及ぼすと考えられる個人の認知・行動過程などの個人差変数を用いることによって、心身の健康状態を包括的に捉えることができることが示されている。したがって、本研究では、Lazarus & Folkman (1984) の心理的ストレス理論を理論的背景に用いて家族の心理・行動の問題を包括的に捉えることで、家庭生活と学校での子どもの行動や適応の関係について検討する。具体的には、子どもの視点から家族の心理・行動の問題を捉えるために、児童が日常の家族関係において経験する些細な苛立ち事としてのストレスの経験、普段から家族に愛され大切にされており、もし何か問題が起こっても援助してもらえる期待の強さである社会的資源としてのソーシャルサポート、を1つの指標として取り上げる。

以上のことから、本研究は、子どもまたはその家族を支援・援助していくための基礎的な知見を求めていくために、家族関係におけるソーシャルサポートとストレスを1つの指標として取り上げ、次の2つを明らかにすることを目的とした。一つ目として、児童が日常の家庭生活の中でストレスとして認知している内容について調査し尺度を作成した。また、作成された尺度の信頼性と妥当性の検討を行った。二つ目として、学級生活の満足度に対して、児童の認知する

家族関係におけるソーシャルサポート、ストレスの影響が考えられる児童について考察した。

研究 1

【目的】

児童が日常の家庭生活の中でストレスとして認知している内容について調査し尺度を作成する。また作成された尺度の信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とする。

【方法】

1. **調査対象** A 県と B 県の公立小学校 9 校に在籍する小学生 583 名 (男子 306 名, 女子 277 名) を対象とした。

2. **測定用具** 小学生用ストレス反応尺度は、嶋田・戸ヶ崎・坂野 (1994) によって作成された尺度の短縮版を用いた。身体の各部位の不調に関連のある項目である「身体的症状」、抑うつ感や不安感に関わりのある項目である「抑うつ・不安」、情動的な怒りや不機嫌な気分に関わりのある項目である「不機嫌・怒り」、やる気のなさや集中力の欠如に関連のある項目である「無気力」の 4 つの下位尺度からなる。評定は「ぜんぜんあてはまらない (1 点)」から「よくあてはまる (4 点)」までの 4 件法である。

家族関係ストレス質問項目の作成方法として、まず 2003 年 12 月に B 県の大学生 38 名に無記名の自由記述方式で次の 2 点について小学校 3～6 年生のことを想起してもらい回答を依頼した。①「あなたが負担を感じたり、あるいは我慢できないと思ったり、そしてあなたが不快や恐ろしいなど感じた、家庭生活における関係・出来事・状況」、②「①のように思ったり感じたりした理由」。

次に自由記述によって得られた①②の回答を kJ 法により項目を整理した。整理した項目と藤井 (1996) の研究より収集した 8 項目について、本研究者と心理学を専攻している大学院生を含めた 4 名により、意味の似ているものを検討・修正し 20 項目とした。その際、家族成員のパーソナリティに関わるもの、家族での決まり・しつけに関するもの (塾や習い事を含む)、

家庭の経済状況に関するもの、非日常的な出来事、など状況の変容が望まれない項目や家庭生活において非日常的な項目は削除した。評定は「ぜんぜんいやでなかった (1 点)」から「ひじょうにいやであった (4 点)」までの 4 件法である。

3. **調査時期と手続き** 2004 年 1 月上旬、A 県の公立小学校 8 校の調査対象の児童に小学生用ストレス反応尺度 (岡安・由地・高山, 1998) への回答を依頼した。また、2004 年 1 月上旬に A 県の公立小学校 8 校、2004 年 1 月下旬に B 県の公立小学校 1 校において、調査対象の児童に、家族関係ストレス質問項目への回答を依頼した。

【結果】

1. 家族関係ストレス質問項目の因子分析結果

調査対象の学年別内訳は 3 年生 30 名, 4 年生 29 名, 5 年生 253 名, 6 年生 271 名の小学生であった。

家族関係ストレス質問項目の集計結果に因子分析 (主因子法, Varimax 回転) を行った (Table 1)。その結果、固有値が 1 以上の解釈可能な 2 因子を抽出した。第一因子は、「できないことを家族から期待された」「自分では理由もわからないのに、あなたが家族に怒られた」などの家族成員からの過度な期待や強要する言動に関連があり、「家族からの期待・強制」と名づけた。第二因子は、「家にいるとき、子どもだけですごした」「あなたときょうだいがけんかした」などの家族関係が不安定であったり疎遠であったりすることに関連があり、「家族関係の希薄・不安定」と名づけた。両因子の信頼性について検討したところ、「家族からの期待・強制」は $\alpha = .819$ 、「家族関係の希薄・不安定」は $\alpha = .613$ 、両因子の全体では $\alpha = .802$ の数値を示した。したがって、信頼性はおおむね確認されたと考えられる。以下、本尺度を「小学生用家族関係ストレス尺度」と表記する。「家族からの期待・強制」の 8 項目の合計点を「家族からの期待・強制得点」、「家族関係の希薄・不安定」の 5 項目の合計点を「家族関係の希薄・不安定得点」とする 2 つの下位尺度からなる 4 件法の尺度である。

Table 1 家族関連ストレス質問項目 因子分析結果

No	項目内容	因子	
		F1	F2
F1 家族からの期待・強制			
12.	家族に「あの子はああなのに…」と比べられるようなことを言われた	.665	.161
11.	親が自分のことをたたいた	.615	.215
7.	できないことを家族から期待された	.609	.106
13.	成績のことを親から言われた	.605	.119
17.	家族にきょうだいと比べられた	.597	.213
19.	家族に理由もわからずあなたがおこられた	.597	.162
2.	親が勉強しろと言った	.463	.061
3.	親がきょうだいばかりかわいがっていた	.449	.245
F2 家族関係の希薄・不安定			
10.	帰宅したらだれもいなかった	.156	.550
4.	きょうだい親におこられているのを見た	.070	.481
20.	家にいるとき、子どもだけですごした	.143	.434
1.	そろって夕食をとれなかった	.151	.457
9.	あなたときょうだいがけんかした	.095	.427
固有値		3.951	1.561
変動率 (%)		30.3	12.0
Cronback の α		.819	.613
因子間相関 F1		-	
F2		.356	

Table 2 カテゴリー別の家族からの期待・強制得点および家族関係の希薄・不安定得点の平均値と標準偏差

	家族からの期待・強制得点	家族関係の希薄・不安定得点
全体	15.20 (6.06)	9.49 (3.08)
男子	15.35 (6.00)	9.15 (3.13)
女子	15.03 (6.13)	9.85 (2.99)
3 学年	16.44 (7.40)	10.17 (2.82)
4 学年	16.33 (4.88)	8.78 (1.96)
5 学年	15.44 (5.94)	9.60 (3.35)
6 学年	14.53 (5.98)	9.04 (2.72)

() 内は標準偏差

2. 小学生用家族関係ストレス尺度の男女差および学年差

調査対象全体、性別・学年別ごとの平均値および標準偏差を Table 2 に記した。カテゴリー間の得点の差を検討するために、*t* 検定および分散分析を行った。

その結果、学年差は認められなかったが、家族関係の希薄・不安定得点に対して性別に有意な差 ($t = -2.74, p < .01$) が認められた。しかし、本研究では、児童が日常の家庭生活の中でストレスとして認知している内容を明らかにすることを目的としているた

め、性別間の分析は行わなかった。

3. 小学生用ストレス反応尺度との関連

尺度の構成概念妥当性を確認するために、小学生用家族関係ストレス尺度の高低とストレス反応の関係を検討した。

「家族からの期待・強制得点」と「家族関係の希薄・不安定得点」の2つの下位尺度それぞれについて平均値と標準偏差を用い、1/2標準偏差より高い数値をストレスを高く認知している群(H群)、12標準偏差より低い数値をストレスを低く認知している群(L群)、その間である中間群(M群)に分類した。

「家族からの期待・強制得点」を分類した3群におけるストレス反応尺度の下位尺度の得点に分散分析を行った。その結果、「身体的症状」($F=10.74, p<.001$)、「抑うつ・不安」($F=23.97, p<.001$)、「不機嫌・怒り」($F=31.34, p<.001$)、「無力感」($F=29.55, p<.001$)であった。すべての因子得点において有意な差が認められたため、FisherのPLSD法による多重比較を行った(Table 3)。結果、「身体的症状」と「抑うつ・不安」と「不機嫌・怒り」では、H群、M群、L群の順で有意に高かった。「無力感」では、H群がM群、L群よりも有意に高かった。したがって、家族成員からの過度な期待や強要する言動を高く認知していると各ストレス反応の表出が高いことが示唆された。

「家族関係の希薄・不安定得点」を分類した3群におけるストレス反応尺度の下位尺度の得点に分散分析を行った。その結果、「身体的症状」($F=7.58, p<.001$)、「抑うつ・不安」($F=20.57, p<.001$)、「不機嫌・怒り」($F=7.51, p<.001$)、「無力感」($F=4.09, p$

$<.05$)であった。すべての因子得点において有意な差が認められたため、FisherのPLSD法による多重比較を行った(Table 4)。結果、「身体的症状」と「不機嫌・怒り」と「無力感」では、H群、M群がL群よりも有意に高かった。「抑うつ・不安」では、H群、M群、L群の順で有意に高かった。したがって、家族関係において疎遠であることや不安定さを低く認知していると各ストレス反応の表出が低いことが示唆された。

したがって、本尺度は児童が日常の家族との関係の中で認知しているストレスを測定できることが示唆され、構成概念妥当性が認められたと考えられる。

【研究1の考察】

結果から、児童にとって日常の家庭生活の中で、「家族からの期待・強制」と「家族関係の希薄・不安定」の2つが主なストレスとなっていることが明らかになった。また、「小学生用家族関係ストレス尺度」について、信頼性が確認され、ストレス反応の表出との関連が認められたため、妥当性も確認された。

児童が日常の家庭生活の中で、嫌悪的あるいは脅威的であるなどネガティブであると認知している出来事を収集・整理した。その際、家族成員のパーソナリティに関わるもの、家族での決まり・しつけに関するもの(塾や習い事を含む)、家庭の経済状況に関するもの、非日常的な出来事、などの項目は削除した。したがって、児童がより日常的な家族成員との関係性の中で経験する出来事から、ストレスを捉えることができたと考えられる。

Table 3 家族からの期待・強制HML群ごとのストレス反応尺度の分散分析結果

	H群 (n=125)	M群 (n=110)	L群 (n=173)	F値 (2, 405)	多重比較 (5%水準)
身体的症状	7.21 (2.38)	6.56 (2.38)	5.92 (2.37)	10.74***	H>M>L
抑うつ・不安	6.44 (2.28)	5.47 (2.33)	4.73 (1.81)	23.97***	H>M>L
不機嫌・怒り	8.03 (2.68)	6.48 (2.64)	5.63 (2.49)	31.34***	H>M>L
無力感	7.33 (2.57)	5.59 (2.21)	5.31 (2.23)	29.55***	H>M, L

()内は標準偏差 *** $p<.001$.

Table 4 家族関係の希薄・不安定 HML 群ごとのストレス反応尺度の分散分析結果

	H 群 (n=109)	M 群 (n=231)	L 群 (n=143)	F 値 (2, 480)	多重比較 (5%水準)
身体的症状	7.01 (2.42)	6.51 (2.27)	5.86 (2.46)	7.58***	H, M>L
抑うつ・不安	6.22 (2.187)	5.70 (2.15)	4.59 (1.97)	20.57***	H>M>L
不機嫌・怒り	7.00 (2.59)	6.88 (2.61)	5.89 (2.88)	7.51***	H, M>L
無力感	6.39 (2.65)	6.15 (2.30)	5.56 (2.51)	4.09*	H, M>L

() 内は標準偏差 * $p<.05$, *** $p<.001$.

板橋・佐野 (2004) は近年の研究を概観し、不登校児の親の養育態度や性格には、①過保護や偏愛、共生的など、結びつきが過度に強いタイプと、②逆に拒否的、放任など結びつきが弱いタイプが存在することを指摘している。「家族からの期待・強制」には、家族成員からの理不尽と思われる言動に関する項目や、家族成員から何かを強いられる項目が含まれている。つまり、家族成員の過度な期待による言動により児童が処理することができない状況に直面させられることによって、嫌悪的あるいは脅威的であるなどネガティブな評価につながっていると思われる。「家族関係の希薄・不安定」には、家族成員との関係が疎遠であることに関する項目や、きょうだいとの間の出来事についての項目が含まれている。つまり、家族成員とのつながりが過度に弱いことや関係が不安定になることによって、嫌悪的あるいは脅威的であるなどネガティブな評価につながっていると思われる。

本研究で用いた小学生用ストレス反応尺度 (嶋田・戸ヶ崎・坂野, 1994) は、身体的反応として「身体的症状」、情動的反応として「抑うつ・不安」と「不機嫌・怒り」、認知的反応として「無気力」、と心身に関する多様なストレス反応を含んでいる。学校場面における心理的ストレス研究において、児童が日常の学校生活で経験するストレスには、「対人関係に関すること」、「学業に関すること」が考えられ、その中でも友人関係のストレスの認知がストレス反応の表出に大きく影響していることなどを明らかにしている。研究1で作成した小学生用家族関係ストレス尺度と

各ストレス反応の表出との関連が認められ、学校場面におけるストレスだけでなく家庭場面におけるストレスが、児童の多様なストレス反応の表出に影響を与えることが認められた。特に、家族成員の過度な期待による言動により処理することができない状況に直面させられることによるネガティブな評価が高い児童は、すべてのストレス反応も高く表出していると考えられる。また、家族成員とのつながりが過度に弱いことや関係が不安定になることによるネガティブな評価が低い児童は、すべてのストレス反応の表出も低いと考えられる。

研究 2

【目的】

学級生活満足度に対して、児童の認知する家族関係におけるソーシャルサポート、ストレスの影響が考えられる児童について考察することを目的とする。

【方法】

1. 調査対象 B 県の公立小学校 1 校に在籍する小学生 89 名を対象とした。
2. 測定用具 児童の学級生活への満足度については、標準化された尺度である「Q-U : QUESTIONNAIRE-UTILITES (小学生用) (河村, 1999) 中の「いごちのよいクラスにするためのアンケート (以下、学級生活満足度尺度とする)」を用いた。具体

的には、学級内で友人等から承認されているか否かと関連する「承認得点」(6項目)と、学級内における不適応感やいじめ・冷やかしの被害の有無と関連する「被侵害得点」(6項目)の2つの因子得点により、児童の学級への満足度を測定し理解している。評定は、「まったくくない、まったくそう思わない、まったくくない(1点)」から「よくある、とてもそう思う、たくさんいる(4点)」までの4件法である。

小学生用家族関係ストレス尺度については、研究1において作成したものをを用いる。家族成員からの過度な期待や強要する言動に関連がある「家族からの期待・強制」(8項目)と家族関係が不安定であったり疎遠であったりすることに関連がある「家族関係の希薄・不安定」(5項目)の2つの下位尺度からなる。評定は嫌悪度について「ぜんぜんいやでなかった(1点)」から「ひじょうにいやであった(4点)」までの4件法である。

小学生用ソーシャルサポート尺度は、将来何か問題が生じた場合に、周囲の人びとからどの程度の援助を期待できるかを調べることを目的とした尺度(久田・千田・箕口, 1989)を、嶋田(1993)が小学生向けに修正したものの短縮版を用いる。本来は5つのサポート源(父親, 母親, 兄弟姉妹, 学校の先生, 友だち)それぞれについてのソーシャルサポートの期待の回答を求めるものであるが、本研究においては5項目に対し、3つのサポート源(父親, 母親, きょうだい)について回答を求めた。評定は、「ぜったいにちがう(1点)」から「きっとそうだ(4点)」までの4件法である。

3. 調査時期と手続き 2004年1月、調査対象の児童に、学級生活満足度尺度(河村, 1999)、小学生用家族関係ストレス尺度、小学生用ソーシャルサポート尺度(嶋田・岡安・坂野, 1993)への回答を依頼した。

調査用紙には、研究の趣旨、本テストが学校の成績に関係がないこと、担任の教師および友だちに回答内容が公開されることがないことを明示した。さらに児童の回答用紙は、用意した封筒に入れその場で密閉し、児童に余計な不安がかからないように配慮した。

【結果】

記入漏れや記入ミスおよびすべてに同じ番号を記入しているなど回答に抵抗があるものについては、欠損値のある尺度について、集計から除外した。調査の有効回答数は、小学校3年生30名(男子15名, 女子15名)、小学校4年生29名(男子16名, 女子13名)、小学校5年生30名(男子17名, 女子13名)であった。

1. 家族からのソーシャルサポート、ストレスと学級生活満足度尺度の「承認得点」、「被侵害得点」との関連

家族関連の要因と学級生活に対する満足度の関係を検討するために、小学生用ソーシャルサポート尺度の3つのサポート源による合計得点で求める家族サポート得点、小学生用家族関係ストレス尺度の2つの下位尺度による合計得点で求める家族ストレス得点と、学級生活満足度尺度の「承認得点」と「被侵害得点」の相関を求めた(Table 5)。その結果、家族サポートと「承認得点」($r = .384, p < .01$)、家族ストレスと「被侵害得点」($r = .412, p < .01$)に有意な中程度の相関が認められた。したがって、ここでは家族サポート、家族ストレスのように家族関連の要因と学級での適応・不適応との関連を示す結果となった。

2. 「家族サポート×家族ストレス」による4タイプの分類

児童の認知する家族の心理・行動の問題をより包括的に捉えるために、家族関連の要因を用いた分類をした上で検討を進めた。

家族関連の要因である家族サポート得点と家族ストレス得点それぞれの合計得点について平均値を用いて、家族の要因が高いH群(家族サポート; 家族からのソーシャルサポートの期待が高い群, 家族ストレス; 家族関係におけるストレスを高く認知している群)、家族関連の要因が低いL群(家族サポート; 家族からのソーシャルサポートの期待が低い群, 家族ストレス; 家族関係におけるストレスを低く認知している群)とした。この2群を用いて、家族サポートと家族ストレスとのバランスの違いにより、家族関連の要因を4つのタイプに分類した

Table 5 家族関連の要因と学級生活満足度尺度の承認得点、被侵害得点の相関

	家族サポート	家族ストレスラー
承認得点	.384**	-.004 n.s.
被侵害得点	-.096 n.s.	.412**

** $p < .01$.

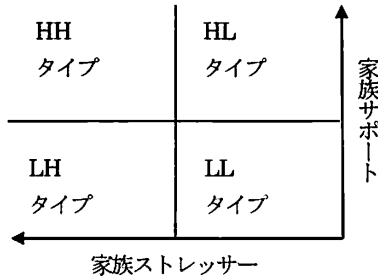


Figure 1 「家族サポート×家族ストレスラー」による4タイプへの分類

(Figure 1)。具体的には、家族関連の要因が高いH群と家族関連の要因が低いL群について、「家族サポート×家族ストレスラー」の形でHH（家族サポート得点、家族ストレスラー得点ともに全体平均よりも高い）、HL（家族サポート得点が全体平均よりも高く、家族ストレスラー得点が全体平均より低い）、LH（家族サポート得点が全体平均より低く、家族ストレスラー得点が全体平均よりも高い）、LL（家族サポート得点、家族ストレスラー得点ともに全体平均よりも低い）であった。

3. 「家族サポート×家族ストレスラー」の4つのタイプによる学級生活満足度の比較

家族サポートと家族ストレスラーとのバランスの違いにより「家族サポート×家族ストレスラー」の形に

分類した4タイプにおける学級生活満足度尺度の「承認得点」と「被侵害得点」に分散分析を行った。その結果、「承認得点」($F=2.97, p<.05$)、「被侵害得点」($F=3.70, p<.05$)であった。すべての因子得点において有意な差が認められたため、FisherのPLSD法による多重比較を行った(Table 6)。結果、「承認得点」では、HHタイプがLHタイプ、LLタイプより有意に高かった。「被侵害得点」では、LHタイプがHHタイプ、HLタイプ、LLタイプより有意に高かった。

「承認得点」は学級内で友人等から承認されているか否かの自己認知と関連しているため、「承認得点」が高い場合は意欲的な行動につながると考えられる。また、「被侵害得点」は学級内における不適応感やいじめ・冷やかしの被害の有無の自己認知と関連しているため、「被侵害得点」が高い場合は不適応行動に至る可能性があると考えられる。したがって、家族サポート得点・家族ストレスラー得点ともに全体平均よりも高いHHタイプが、家族サポート得点が全体平均より低いLHタイプ、LLタイプより学級内での意欲的な行動を示していることが考えられる。また、家族サポート得点が全体平均より低く、家族ストレスラー得点が高いLHタイプが、他の3つのタイプより不適応行動に至る可能性を有していることが考えられる。

Table 6 「家族サポート×家族ストレスラー」の承認得点と被侵害得点の分散分析結果

	HH (n=13)	HL (n=19)	LH (n=14)	LL (n=11)	F値および (3, 53)	多重比較 (5%水準)
承認得点	19.46 (3.756)	18.21 (2.92)	16.50 (2.65)	16.09 (3.81)	2.97 *	HH > LH, LL
被侵害得点	13.31 (6.20)	12.74 (3.02)	16.50 (3.48)	11.46 (3.08)	3.70 *	LH > HH, HL, LL

()内は標準偏差 * $p < .05$.

4. LHタイプの学級での状態像の検討

河村 (1999) の分析方法にしたがって、学級生活満足度尺度の「被侵害得点」をX軸にとり、「承認得点」をY軸にとり、それぞれの平均点の軸によって分けられた4象限をそれぞれ、学級生活満足群、非承認群、侵害行為認知群、学級生活不満足群とし、学級生活満足度による4群とした(以後、満足度4群とする)。河村・田上(1997)、河村(1999)は、満足度4群のそれぞれの特徴について述べている。具体的には、「学級生活満足群」は、学校生活は多少のトラブルがあっても安心して生活できる場であり、その中で学級や学校内でその存在を認められるような意欲的な活動をしていることが推測される。したがって、一次的教育援助レベルを中心に対応できる児童生徒であると考えられる。「非承認群」は、対人関係や学級集団に意欲的にかかわってトラブルに巻き込まれるよりも、距離をとることで自分の安定を守ろうとする像が推測された。「侵害行為認知群」は、意欲的な学級での生活や活動への取り組みが級友に受け入れられない面があり、そこにトラブルが発生し、その対処に苦慮しているという図式が考えられる。「非承認群」、「侵害行為認知群」は、二次的教育援助レベルを意識した対応が必要である児童生徒であると思われる。「学級生活不満足群」は、いじめ被害の状態や不登校に至る可能性がとても高いとともに、「ふつうの児童生徒」では難なく通り過ぎてしまう問題、気にしないレベルの内容にも過剰に反応してしまうような特性があることが考えられる。三次的教育援助レベルを意識した対応を教師はとる必要があると考えられる。

家族サポート得点が全体平均より低く、家族ストレス得点が全体平均よりも高いLHタイプは、他の3つのタイプより学級での生活において困難を感じている可能性が明らかになった。そこで、学級での状態像を検討するために、LHタイプを抽出し(14例)、満足度4群の出現度数を集計した(Table 7)。その結果、満足度4群の出現度数においては、学級生活満足群が1例、非承認群が1例、侵害行為認知群が6例、学級生活不満足群が6例であった。侵害行為認知群、学級生活不満足群それぞれが約40%を占めている結果となった。したがって、LHタイプの約80%は特に学級内における不適応感やいじめ・冷やかしの被害つ

Table 7 LHタイプの満足度4群の割合

満足度4群	人数
学級生活満足群	1 (7.1)
非承認群	1 (7.1)
侵害行為認知群	6 (42.8)
学級生活不満足群	6 (42.8)

()内の数値は全体中の人数比(%)を示す

いて高く認知していると考えられる。

【研究2の考察】

結果から、児童の学級生活に対する満足度と、家族からのソーシャルサポートの期待、家族関係におけるストレスの認知との間に関連が認められた。また、家族からのソーシャルサポートの期待と家族関係におけるストレス認知という2つの家族関連要因のバランスの違いにより、児童の学級生活に対する満足度にも違いが認められた。したがって、子どもの認知する家族関係が子どもの行動や適応に影響しているという西出・夏野(1995)、築地(1999)の実証研究の指摘は、本研究からも支持されたといえる。

1. 家族からのソーシャルサポート、ストレスと学級での「承認感」「被侵害感」との関連

本研究では、Lazarus & Folkman (1984)の心理的ストレス理論を理論的背景に用いて家族の心理・行動の問題を包括的に捉えることで、家庭生活と学校での子どもの行動や適応の関係について検討した。心理的ストレス理論は、出来事の実験の有無だけでなく、個人が経験した出来事をどのように意味づけ、どのような対処方法を選択するのか、という一連の心理的プロセスを包括的に捉えている。また、個人のストレス反応を緩衝する要因のひとつとして、社会的資源であるソーシャルサポートの概念があげられている(岡安・嶋田・坂野, 1993)。したがって、心理的ストレス理論(Figure 2)から本研究の結果の解釈を行う。なお、本研究において指標として取り上げたのは、児童が日常の家族関係において経験するストレスの経験(Figure 2での「①心理的ストレスの経験」)、も

し何か問題が起こっても援助してもらえる期待の強さである社会的資源としてのソーシャルサポート (Figure 2 での「ソーシャルサポート」のうちサポート源は家族のみ) であった。

(1) 家族からのストレスと「被侵害感」との関連

学級内における不適応感やいじめ・冷やかしの被害の認知と家族関係におけるストレスの認知の関連が認められた。つまり、家族関係におけるストレスの認知が高い場合には、不適応行動に至る可能性があると考えられる。しかし、児童が日常の家族関係においてストレスとなる出来事を経験することが、学級内における不適応感やいじめ・冷やかしの被害の認知に直結するとは考えにくい。この点は、心理的ストレス理論から2つの解釈が可能であると考えられる。1つは、児童が日常の家族関係においてストレスとなる出来事 (Figure 2 での「①心理的ストレスの経験」) を経験することで、ストレス反応 (Figure 2 での「④ストレス反応」) が表出されているために、学級内における不適応行動が表れていることが推測される。研究1において、児童が「家族からの期待・強制」「家族関係の希薄・不安定」それぞれのストレス

を高く認知していることと、多様なストレス反応の表出との関連が認められた。つまり、児童が日常の家族関係においてストレスとなる出来事を実際に経験しており、「身体的症状」「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」といった多様なストレス反応を表出している。そして、家族関係に起因したストレス反応としてイライラした感情、不安感、身体症状などを訴える児童が、学校生活を送る中で二次的反応として学級内における不適応行動が表れていると推測される。もう1つは、ストレス自体に関する「影響性」とストレスに対する「コントロール可能性」という児童の認知的評価 (Figure 2 での「②認知的評価」) によって、学級内における不適応感やいじめ・冷やかしの被害が認知されていることが推測される。嶋田・三浦・坂野・上里 (1996) は、小学生の認知的評価は、出来事の「重要性」、「影響性」などストレス自体に関する評価とストレスに対する「コントロール可能性」の2種類に分類可能であると述べている。また、ストレスに対する影響性や重要性を高く評価する児童はストレス反応の表出が高く、逆にコントロール感が高い場合にはストレス反応を表出しにくい傾向にあることが述べられている。つまり、出来事の影響性を高く評価する・コントロール感が低いといった認知的評価の傾向を持つ児童が、日常の家族関係における出来事をネガティブな評価として高く認知する。さらに、学校内における出来事についてもネガティブな評価として高く認知するため、学校生活を送る中で不適応感やいじめ・冷やかしの被害を認知しやすいことが推測される。

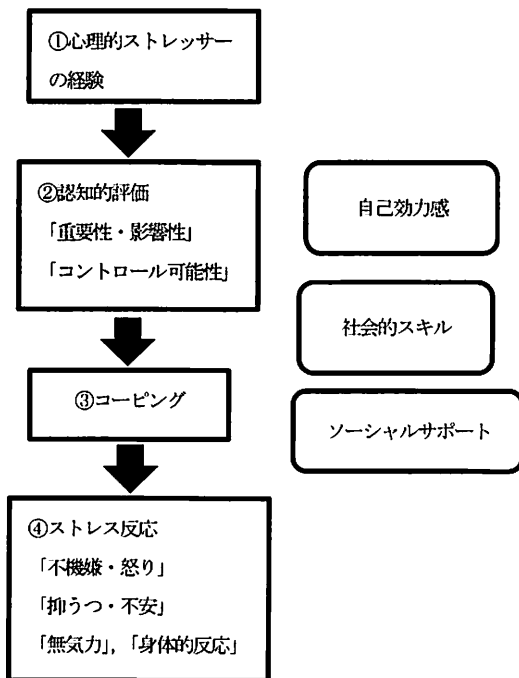


Figure 2 心理的ストレス理論

(2) 家族からのソーシャルサポートと「承認感」との関連

「良好なソーシャルサポートを得ることは心身の健康の維持・促進につながる」という数多くの研究 (森・堀野, 1992; 岡安・嶋田・坂野, 1993; 嶋田, 1993) と同様に、家族からのソーシャルサポートの期待と学級内で友人等から承認されているという認知との関連が認められた。つまり、家族からのソーシャルサポートの期待が高い場合には、学級での意欲的な行動につながると考えられる。渡辺 (2002) は、知覚された家庭のソーシャルサポートの期待は、家庭の社会的スキルを媒介とし、学校の社会的スキルの獲得に関

与していることを示唆している。また、岡安・嶋田・坂野 (1993) は、サポート入手可能性への期待は、ストレスに対する影響性やコントロール可能性といった認知的評価に影響を及ぼすことによって、ストレス反応の生起を制御するとの考えを述べている。したがって、対処に困った際に家族からサポートを受けた経験から、社会的資源である家族からのソーシャルサポート (Figure 2 での「ソーシャルサポート」) の期待が高まる。家族からのソーシャルサポートの期待は、出来事の影響性の評価を低める・コントロール感を高めるといった形で個人差変数である認知的評価 (Figure 2 での「認知的評価」) にポジティブな影響を及ぼすとともに、家庭場面を媒介して学校場面での社会的スキルの獲得 (Figure 2 での「社会的スキル」) にポジティブな影響を及ぼすことによって、学級での意欲的な行動につながっていると推測される。

2. 「家族サポート×家族ストレス」LH タイプの児童が認知している家族関係

家族からのサポート期待と家族関係におけるストレス認知という2つの家族関連要因のバランスの違いにより、「家族サポート×家族ストレス」の形で家族関連の要因を4つのタイプに分類した。岡安・嶋田・坂野 (1993) は、知覚されたソーシャルサポートの水準が高いことは、過去に他者からサポートを受けた経験が多いことや他者との親密度が高いこと、すなわちサポート入手可能性に対する期待が高いことを意味していると述べている。また、研究1において、家族成員からの過度な期待や強要する言動に関連がある「家族からの期待・強制」、家族関係が不安定であったり疎遠であったりすることに関連がある「家族関係の希薄・不安定」の2つが、児童の日常の家族関係におけるストレスとなっていることが示唆された。家族関連要因のバランスがLHタイプの児童は、サポート期待は低いもののストレス認知が高いことから、これまで家族からサポートを受けた経験が少なく家族との親密度を感じられないため、家族からサポートを得る期待が低い。また、家族からの過度な期待や強要する言動や、家族関係の不安定さや疎遠であると評価される出来事が強調されていることがうかがわれる。亀口 (1991)、井上 (1992)、長谷川 (2001) の

事例研究によって、不登校児を抱える家族には、子どもの不適応に対する援助機能の弱さや家族関係の問題などが示唆されている。つまり、LHタイプの児童は、家族に対して援助機能の弱さや家族関係でのネガティブな出来事を強く認知していると思われる、不登校児を抱える家族の特徴と類似した形で認知していることが推測される。

一方で、家族からのソーシャルサポートの期待は学級での意欲的な行動につながるということが認められた。つまり、家族は児童にとって重要な援助資源であり、家族からのサポート環境を整えることが、学校場面での適応や発達には必要であると考えられる。家族からのサポート環境を整えるために、児童が家族からサポートを受けた経験を増やし、家族との親密度を高めることが1つの視点になると思われる。そのためには、河村 (2007) の指摘の通り、親からあいさつをする、親が同じ視線を持つといったことを留意しながら、親が子どもに対して「あなたはかけがえのない存在なのだ」ということをしっかり伝えることが大切になるだろう。

3. LHタイプの児童の学級での状態像

LHタイプについては、HHタイプより学級内で友人等から承認されているという認知が低く、他の3つのタイプより学級内における不適応感やいじめ・冷やかしの被害の認知が高く、学級での生活において困難を感じている可能性がうかがえる。また、LHタイプは、侵害行為認知群と学級生活不満足群を合わせると約8割を占める結果となっており、不登校状態など大きな問題行動や症状的行動に至る可能性も考えられる。河村・田上 (1997)、河村 (1999) は、「侵害行為認知群」は、学級での意欲的な取り組みが受け入れられない面があり、トラブルが発生しその対処に苦慮していることが考えられ、「学級生活不満足群」は、学級での些細な出来事に過剰に反応してしまうような面があり、いじめ被害や不登校に至る可能性の高いことが考えられると述べている。つまり、LHタイプの児童の多くは、特に学級内における不適応感やいじめ・冷やかしの被害が考えられ、二次的教育援助レベル以上の対応が必要である児童であると考えられる。しかし、侵害行為認知群と学級生活不満足群とは学級での状態像に違いがあり、同じLHタイプの児童でも個々により

援助ニーズの違いがあると考えられる。さらに、LHタイプの児童の学級での状態像には、家族の心理・行動の問題が複合的に関連していると考えられる。したがって、学級での生活において児童が感じている困難さを大きくしないために、LHタイプの児童に対して、児童の認知する家庭場面を視野に入れた総合的なアセスメントをした上で、二次的教育援助レベル以上を意識した対応を教師はとる必要があると考えられる。

近年、父子・母子家庭をはじめとする多様な家族形態、家庭でのしつけや虐待に関する問題、集金未納など家庭の経済的問題など、さまざまな家庭背景の子どもが学級に在籍している現状を学校現場は抱えている。日常生活を共にし、身近に持続的な関係を持つ家族だからこそ、輻輳的な様相を呈しており、そうした家庭背景の子どもへの継続した支援・援助が求められることも多くある。学校は家庭や心理・福祉の専門機関と連携を図りながら、チームとして、子どもの適応や発達にかかわることが必要となってきた。本研究では、LHタイプの児童が日常生活を共にし、持続的な関係を持っている家族の状態像を検討するには至っていない。しかし、実際の家庭背景にかかわらず、LHタイプの児童が認知する家族関係は、家族に対して援助機能の弱さや家族関係でのネガティブな出来事が強調されているという形で家族の心理・行動の問題が表れていると考えられる。そして、LHタイプの児童は、家族の心理・行動の問題の影響によって、学級での生活において困難を感じている可能性が考えられる。したがって、実際の家庭背景にかかわらず、LHタイプの児童に対して、学校は家庭や心理・福祉の専門機関と連携を図りながら、チームとして、継続した支援・援助が必要な場合があると考えられる。また、家族を児童にとっての援助資源としてより機能させるために、学校は家族に対して援助・指導する視点も大切になるだろう。

最後に、心理的ストレスを一連のプロセスとして包括的に捉えたと、家族からのソーシャルサポートの期待は、認知的評価や社会的スキルという児童の認知・行動過程の個人要因にポジティブな影響を及ぼすことによって、学級での意欲的な行動につながっていることが推測された。LHタイプの児童は、家族からのソーシャルサポートの期待が高まっていないため、認知

的評価や社会的スキルという児童の認知・行動過程の個人要因へ及ぼす影響が十分ではない可能性が推測される。したがって、LHタイプの児童に対して、学校教育においても、認知・行動過程の個人要因の成長や発達を意図したアプローチが必要であると考えられる。河村(2007)は学校教育での成長が期待される子どもたちの心理・社会的特性として、効力感、セルフコントロール、対人積極性、向社会性を挙げている。LHタイプの児童の心理・社会的特性を育成するためにも、教師は学びあい・かかわり合いのある集団を育てる学級経営の視点を併せ持つ必要があると考えられる。

【今後の課題】

本研究では、学級満足度に対して、児童の認知する家族関係におけるソーシャルサポート、ストレスの影響が考えられる児童について考察した。心理的ストレスを一連のプロセスとしてより詳細に捉えるためには、認知的評価や社会的スキルという児童の認知・行動過程も含めた検討が求められるだろう。さらに、家族形態や構造、親の養育態度など実際に児童が日常生活を共にし、持続的な関係を持っている家族の状態像を詳細に検討するには至っていないことにも留意する必要がある。本研究で得られた知見を基に臨床像を検討することで、子どもまたはその家族を支援・援助する指針が得られると思われる。今後の課題にしたい。

【引用文献】

- 藤井克也 1996 児童を対象にしたストレスによるストレス反応予測の試み 日本健康心理学会第9回大会発表論文集, 80-81.
- 長谷川啓三 2001 臨床家として家族療法を学ぶ 臨床心理学, 1, 423-436.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 井上美紗子 1992 分離不安型登校拒否の再考 家族心理学研究, 6, 37-48.
- 板橋登子・佐野秀樹 2004 不登校児の母親についての研究の現状と課題 カウンセリング研究, 37,

- 74-84.
- 亀口憲治 1991 「家族境界膜」の概念とその臨床的応用 家族療法, 8, 20-29.
- 亀口憲治 1997 子どもの問題行動と環境 家族の問題—こころの危機と家族のかかわり 人文書院 148-167.
- 柏木恵子 2003 家族とその起源・進化・発達 家族心理学—社会変動・発達・ジェンダーの視点 3-56.
- 河村茂雄 1999 楽しい学校生活を送るためのアンケート「Q-U」実施・解釈ハンドブック (小学校編) 図書文化社
- 河村茂雄 2007 データが語る③家庭・地域の課題 図書文化社
- 河村茂雄・田上不二夫 1997 いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成 カウンセリング研究, 30, 112-120.
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York : Springer
- 文部科学省 2011 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
- 森 和代・堀野 緑 1992 児童のソーシャルサポートに関する一研究 教育心理学研究, 40, 402-410.
- 中釜洋子 2001 家族療法から見た家族 児童心理学の進歩, 40, 155-181.
- 西出隆紀・夏野良司 1995 家族システムの機能状態が子どもの学校適応感に与える影響に関する一研究 家族心理学研究, 9, 23-34.
- 岡堂哲雄 2000 家族カウンセリング 金子書房
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- 岡安孝弘・由地多恵子・高山 巖 1998 児童用メンタルヘルス・チェックリスト (簡易版) の作成とその実践的利用 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター研究紀要, 5, 27-41.
- 嶋田洋徳 1993 児童の心理的ストレスとそのコーピング過程—知覚されたソーシャルサポートとストレス反応の関連— ヒューマンサイエンスリサーチ, 2, 27-44.
- 嶋田洋徳・三浦正江・坂野雄二・上里一郎 1996 小学生の学校ストレス—に対する認知的評価がコーピングとストレス反応に及ぼす影響 カウンセリング研究, 29, 89-96.
- 嶋田洋徳・岡安孝弘・坂野雄二 1992 児童の心理的ストレスと学習意欲の関連 健康心理学研究, 5, 7-19.
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1994 小学生用ストレス反応尺度の開発 健康心理学研究, 7, 46-48.
- 築地典絵 1999 Family System Test を用いた児童の家族関係の研究 カウンセリング研究, 32, 264-273.
- 渡辺弥生 2002 児童期における家庭のソーシャルサポートが家庭及び学校の社会的スキルに与える影響について 法政大学文学部紀要, 48, 203-220.

【付 記】

本研究の一部は、日本カウンセリング学会第40回大会においてポスター発表を行った。

(2012年10月10日 受稿, 2013年2月12日 受理)

Study on the influence of social support and stressor in the family relationships on class life satisfaction in elementary school

Tomomi Koizumi (Yamagata prefecture school counselor) , Shigeo Kawamura (Waseda University)

This research has two purposes. One is to create a “Family Relationship Stressor Scale for Elementary School Students” to reveal what they recognize as daily stressors in family relationships. The other is to consider how social support and the stressor of family influence students’ degree of satisfaction with class life. The results indicated that ①two factors, “the expectation and compulsion of family” and “subtlety and instability of family relationships,” were extracted from the “family relationship stressor scale for elementary school students”; thus, the reliability of the scale has been confirmed. Further, ② when the expectation of social support from family was higher, the students acted more enthusiastically in school; when the cognition of family relations as a stressor was stronger, they acted in a more maladjusted manner in school. Moreover, ③ because of the balance between social support and family relationships as a stressor, differences were observed in the degree of satisfaction with class life. Especially, 80% of LH-type students with low expectation of support but high recognition of family as a stressor belonged to either an infringement cognitive group or a class-life-dissatisfied group. Therefore, teachers need to form a correspondence that takes into consideration that which is greater than secondary assistance.

Key word : primary school children, class life satisfaction, social support ,
stressor family relationships